

「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエル(神の戦士)と呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ(創世 32:29)」。

神に勝ったヤコブ、ヤコブに敗けた神。印象的な場面なので幾度も引用してきたが、今日はこの出来事に腰を据え、「人間に敗ける神」について思い巡らせてみよう。

弟ヤコブは族長の長子権を騙し取り(27:18~29)、兄エサウは「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り(アガブ)欺いた(27:36)」と叫び、殺意を燃やした(27:41)。

ヤコブは逃亡し、東方の族長ラバンの許(29:1~14)で20年間(31:41)勤勉に働いた。ラバンは、まやかしの婚姻(29:25)と不正な報酬(31:7)でヤコブをこき使い、ヤコブの創意工夫は大きな利益をもたらした(30:43)。ヤコブは一族を連れて脱走し(31:17~18)、兄エサウと再会する前夜、神と格闘する(32:25)。これが大筋だが、人間の憎悪、狡猾、誠実、恋愛、経済の浮き沈みなどが鮮やかに記されている。

神の民イスラエルの祖(32:29,35:10~11)だからといって、ヤコブが必ずしも高潔なわけではない。だが神は常に、彼と共に働き、共に創造し、共に苦難に遭っていた。

ヤコブは率直で、どうにもならない命運に対しても、早々に諦めたりはしない。「いいえ、祝福してくださいまで離しません(32:27)」。

ヤコブは不正な行為をし、懸命に働き、諸々の策略に翻弄された。神と闘って腿の関節を外されても(32:26)神に詰め寄り、共におられる神の存在を覚えながら、恵みにおいては恵みを、試練においては試練として受け取っていた。だからといって、神が与え給う運命を「御心のままになりますように」と甘受していたわけではない。

「もう去らせてくれ(32:27)」と言う神に、「いいえ、祝福してくれるまで離さない」と傷つきながら抵抗する。その生涯を、神と真剣に闘うという仕方で、神に従っていた。

神の「御心」という隠された普遍的な真理があって、その真理に私たちが同調していくことが信仰なのではない。「御心リスト」があったとしたら、どうやってそれを知るのか。結局は、知りうる悔い改めとか奉仕とかの教会の律法に、「御心」を引き寄せることになる。だから神と闘い、神に従うのだ。

八ヶ岳伝道所の開拓初期、どうにもならないことが幾つかあって、「この伝道は御心ではないかもしれない」と立ち尽くした。開拓伝道を始める時には「御心だ」と思い込み、うまくいかないと「御心ではないかも」と揺れ動く。御心が都合に応じた口実になる。

いかなる時も神は私たちと共におられ、共に喜び、共に苦しんでおられる。とはいっても、御心なのか、教区の決まり事なのは分からない。

ただ「いいえ、離しません(32:27)」と闘い挑むと、神は根負けし、祈りを聞き届けて下さった。

「[わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ]と書いてある通り(ロマ 9:13)」。なぜ神がエサウを憎むのかは分からない。「では、どういうことになるのか。神に不義があるのか。決してそうではない(9:14)」。その説明はなく、ただ「決してそうではない」のみだ。

信仰には「神に不義があるのか」と激しく迫るほどの真剣な問いが生ずる。その答えは、根拠なく「決してそうではない」のみだ。「人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるもの(9:16)」。

このとんでもない憐れみで、八ヶ岳伝道所は建てられた。



#### 《おまけのひとこと》

風(聖霊)は思いのままに吹く(ヨハネ 3:8) 御心は風として吹いている 私たちもまた留まることなく サッカーの試合のごとく 御心のボールを追い 衝突し 転げ回り 傷つき 歓喜や涙を味わう